

「注腸検査法マニュアル」

鹿児島共済会南風病院院長 西俣 寛人 編集
 鹿児島共済会南風病院政記念消化器病研究所所長 西俣 嘉人
 鹿児島共済会南風病院中央放射線部技師長 伊原 孝志
 鹿児島共済会南風病院消化器病センター放射線部主任 江平 俊雄 著
 鹿児島共済会南風病院中央放射線部主任 土器屋 貴

京都がん協会消化器科

多 田 正 大

大腸疾患が増加しており、診療を希望する患者が病院で列をなしているが、担当医不足が嘆かれている。特に内視鏡医不足は深刻であり、専門医のいる病院では検査予約が1～2か月先といった状態である。なぜなら大腸内視鏡は手技が難しく、しかも偶発症を起こす危険性が高いため、医師の育成がニーズに追いつかない状況にあるからである。その点、注腸検査の場合は基本的な撮影マニュアルに従うと、比較的画一的な手法で撮影できるし、フィルムを熟練医と一緒に読影すれば誤診、見逃しもカバーできる。なによりもX線被曝を除いて、重篤な偶発症が発生しないことがメリットである。大腸癌検診が軌道に乗り、精密検査件数が増加するにつけて、内視鏡医不足を注腸検査でカバーしようとする傾向は当然のことであろう。法律上のことはともかく、現実には医師に代わって腕の良い放射線技師が検査を担当する施設も増えていると聞いている。

南九州の消化器診断学を常にリードする西俣寛人、嘉人両先生一校島のような熱いエネルギーとお人柄にはいつも敬服しているのであるが、編集して、南風病院の放射線科スタッフである伊原孝志技師ら3名による共同執筆「注腸検査法マニュアル」

」を早速読ませていただいた。まえがきに西俣先生が“注腸検査法の診断能が内視鏡検査に遜色なく、またそのテクニックもそれは難しいものではないという理解が広まることを期待して……”と記述しているが、まさに本書の出版目的がこの一文に込められており、全体のバックボーンとなっている。

消化管X線診断学の創造と普及に多大な功績を残した故白壁彦夫先生、その門下生であった故政信太郎先生の薫陶と指導の下に、西俣先生らの弛まぬ努力の結果確立されたのが今日の鹿児島消化管診断学である。その伝統はX線像と内視鏡像、病理所見を頑念に対比することを出発点としており、本書でもその精神は貫かれており、診断学を志す同志の一人として共鳴するところが大きい。

表紙に掲載されたX線像はもちろん、本文の画像も拔群である。定価との兼ね合いもあったのであろうが、見事な写真は大きく掲載してほしかった。前処置や造影剤をどうするか、実際の撮影体位やタイミング、困ったときの対応の仕方等々、具体的なテクニックに関する記述は、現場で汗を流している放射線技師だからこそ書ける貴重な体験的記述であり、読者の手技と読影に関す

る疑問はたちどころに氷解する。最近のX線診断に関する書籍の中では群を抜く内容であり、実に好感が持てる。文章は更に推敲すべき箇所がいくつかみられるが、見事なX線画像と執筆者の熱い情熱に免じて、改訂版の発行まで目をつぶることにしたい。

最近、内視鏡関係の書籍の出版は数多いものの、X線分野は寂しい。特に上部消化管検査・診断ではこの傾向は顕著であり、若い医師のX線離れの傾向が危惧されるようになってから久しい。わが国で育成されたX線診断の流れを知る一人として、まことに嘆かわしい状況にある。そのような時流に流されることなく、西俣グループは常に“X線診断も捨てたものではない、むしろ活用すべき良い面も多い”というメッセージを発信している。その熱い思いを込めた書籍であるからこそ、本書が再びX線診断学を見直す起爆剤になるものと信じている。消化管診断学を追求する医師のみならず、放射線技師にも読破してほしい注腸検査、大腸診断学の手引書として推薦したい。

● B5 頁224 図57 写真468
 カラー写真45 表11 1999
 定価(本体4,700円+税) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)